

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 5月 24日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592519

研究課題名（和文） 長期的な子育て力につながる「女性を中心としたケア」の実証

研究課題名（英文） Woman-centered care that provides long-lasting empowerment for women experiencing childbirth and childrearing

研究代表者

永森 久美子（NAGAMORI KUMIKO）

聖路加看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：60289965

研究成果の概要（和文）：

2010年～2011年度

研究目的

妊娠期から産褥期にかけて助産師が継続ケアを行う助産師主導ケアと、医師主導ケアを受けた母子の健康状態を比較する。

研究方法

研究対象者は、正期産で経膈分娩によって単胎児を出産した女性である。女性を中心としたケア-妊娠期尺度、Steinのマタニティーブルーズ尺度(SteinのMB)、エジンバラ産後うつ病自己評価票(EPDS)と分娩のアウトカムを比較した。

結果

1) 助産主導ケアを受けた女性の女性を中心としたケアの認識($p < .001$)と、妊娠・分娩・産褥期を通じた満足度($p < .001$)は、医師主導ケアを受けた女性よりも有意に高かった。2) 助産師主導ケアを受けた女性は、医師主導ケアを受けた女性と比較して前期破水($p = .030$)が有意に少かった。3) 助産師主導ケアを受けた女性は、医師主導ケアを受けた女性よりも完全母乳率($p < .001$)が有意に高かった。4) 助産師主導ケアを受けた女性のSteinのMB得点は、医師主導ケアを女性と比較して有意に低かった($p < .001$)。

2012年度

研究目的

本研究の目的は、妊娠期から出産後までチーム助産による継続的なケアを受けた女性が、どのような体験をしていたのかを探索することである。

方法

妊娠期から出産後まで助産主導ケアを継続的に受けていた女性にグループインタビューを用いた。インタビューの内容は、「どのようなケアを受けたか」、「ケアはどのようなものであったか」などであった。

結果

<助産師と信頼関係を築く>、<不安を取り除き安心感を得た>、<前向きに取り組めた>、<顔見知りだからこそ得られた個別のケア>、<ありのままにいられた>、<助産師とつながる>という6つのカテゴリーが抽出された。

研究成果の概要（英文）：

The year 2010～2011

Purpose

The objective of this study was to compare the outcomes of women and infants who received midwife-led care with obstetrician-led care.

Methods

Included were women who had a term-singleton-birth by vaginal delivery. Instruments included: Women-centred care (WCC) pregnancy questionnaire, Stein's maternity blues (Stein's MB) scale, Edinburgh Postnatal Depression Scale (EPDS) and Care Satisfaction Scale.

Findings

1) the perception of WWC was higher in the midwife-led group ($p < .001$) and their satisfaction with care was higher throughout the maternity period ($p < .001$) than the women in the obstetrician-led group. 2) women in the midwife-led group had less premature rupture of membranes ($p = .030$). 3) women in the midwife-led group engaged more exclusively in breast-feeding ($p < .001$) and 4) women in the midwife-led group showed significantly lower scores in Stein's MB scale than those in the obstetrician-led group ($p < .001$).

The year 2012

Purpose

The objective of this study was to investigate women's experiences who had recently experienced childbirth and who received "woman-centered care" services

Methods

Group focus interviews were conducted. Participants were asked about their "Types of care services," and "Impressions of care services."

Findings

The categorized as follows: "Building a trustful relationship with the midwife," "Relieving anxiety and obtaining a sense of security," "Handling things proactively," "Personalized care thanks to familiarity," "Letting one be oneself," and "Bonding with the midwife."

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：助産師・継続ケア・妊産褥婦

1. 研究開始当初の背景

2008年度の日本の合計特殊出生率は1.37であり、ひとりの女性が生涯に経験する妊娠・出産の経験は非常に貴重な時間となっている。妊娠・出産は、本来女性の身体に備わっている生理的な生殖機能が発露する時期であり、それまでに自覚することが少なかった内分泌ホルモンの心身への影響をはっきり自覚することになる。特に妊娠時期は40週にわたって多様に変化する時期であるため、妊婦は自分自身の健康管理や家族の健康改善に眼を向ける好機となる。

女性の健康ニーズに効果的に応えるには、医療者は女性とパートナーシップを組む必要がある、この基盤となる概念が“女性を中心としたケア”である(Pope et al., 2001)。“女性を中心としたケア”(Women-Centered Care, 以下 WCC と略す)は尊重・相互作用・安全・ホリスティックの属性をもち、結果として女性のエンパワーメント、健康の獲得、不安の軽減、ケアの満足感や自信が挙げられている(Horiuchi et al., 2006)。医療者の基本姿勢は；個人としての女性を尊重すること、相手を脅かさないケアを行うこと、対等な立場で協働すること、女性の希望を最優先することが指摘されている(Horiuchi et al., 2009)。WCCは女性の総合的なwell-beingを目標としており、英国のNational Institute for Clinical Excellence(NICE)の健康な妊婦のルチンケア(2008)の理念として掲げられている。

WCCの視点から産後の女性482人に妊婦健診をどう受け止めたかを調査した結果(飯田, 2009)、病院・診療所・助産所の比較では、助産所におけるWCC得点が有意に高く、健診時に「医療者と同じくらい」もしくは「自分の方が多く」話しができた妊婦の方が、「医療者が多く話す」よりもWCCの得点が高く、

満足度も高かったと報告している。

Gepshtein, Horiuchi & Eto(2007)が行った助産所での参加観察では、“個人のやり方と自然の流れの尊重”したケアがあり、その結果“幸せ、前向きな変化、母と子の強い絆、長期的な健康”がもたらされると指摘している。同様に竹原ら(2009)によれば、助産所のケアの質として「産み育てるための心と身体を作る」という大きな目標があり、妊娠中に「知恵を伝承する」「自覚を促す」「徹底的な生活改善を促す」「具体的なやり方を提示する」「すべてを受け止める」「個々の状況に合わせる」「妊婦を大切にす」ケアが実施されていると指摘する。

一方、研究者ら(堀内、永森他、2007)が行なった都市部での子育て支援の実態調査では、母親の意向を尊重しない押し付けの指導や、実生活に役立たない育児相談であるため、逆に母親が戸惑い、不安になっていることが明らかになった。

産科医療が崩壊し“お産難民”や孤独な子育てが問題視され、院内助産所が着目されている今日、医療提供システムだけの提案ではなく、母親の意思を尊重した本質的ケア内容の吟味が必須であるという考えに至り、WCCの実証を行なう必要があると本研究を着想した。

2. 研究の目的

研究の目的特定の助産師チームが継続的に妊婦個別に“女性を中心としたケア”を提供した結果、その後の出産・育児期にわたる長期的な子産み子育て力につながるかどうかを実証することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 2010～2011年度：助産師主導ケアと医師主導ケアの母子の健康状態の比較

研究対象者は、正期産で経膈分娩によって

単胎児を出産した女性である。研究期間は2011年の2月から10月までであった。

用いた測定用具は、女性を中心としたケア-妊娠期尺度、Steinのマトニティーブルーズ尺度(SteinのMB)、エジンバラ産後うつ病自己評価票(EPDS)を用いた。分娩のアウトカムに関しては、研究者が診療録より直接データ収集を行なった。質問紙の配布は、入院中の出産後3日目以降と1ヶ月健診時の2回行った。

入院中の女性280人(助産師主導149人、医師主導131人)とそのうち出産1ヶ月後に回答をした女性238人(それぞれ133人と105人)が分析に含まれた。

(2) 2012年度：助産師主導による継続したケアを受けた女性の体験

妊娠期から出産後まで継続的に助産師主導による継続的なケアを受けていた女性13人で、データ収集は2013年3月にグループインタビューを用いた。インタビューはケアを提供しない研究者が担当し、インタビュー回数は1回、1グループ4~5名程度、インタビュー時間は約1時間半とした。インタビューの内容は、「チーム助産のケアを選んだ理由」、「どのようなケアを受けたか」、「ケアはどのようなものであったか」などであった。インタビューの内容を逐語に起こしたものをデータとし、「チーム助産から受けたケアがもたらしたもの」が語られている部分を抽出し、類似するものをカテゴリー化した。

4. 研究成果

(1) 助産師主導ケアと医師主導ケアの母子のアウトカムの比較

①女性の基礎データ：平均年齢は、助産師主導グループは33.2(±4.3)歳、医師主導グループは31.7歳(±4.3歳)と助産師主導グループの方が有意に高かった($p < .005$)。し

かし、34歳以下と35歳以上に区切った場合の差はなかった。初産婦の割合は助産師主導グループ40.3%、医師主導グループ51.9%と分娩歴の差はなかった。

②ケア内容：ケアの形態は表1に示す通り、助産師主導グループがケア時間は長く、女性が話す量が有意に多かった($p < .001$)。

表1 ケア形態の比較

	助産師主導		医師主導	
	n	(%)	n	(%)
1回のケア時間				
10分以下	6	(4.0)	70	(53.8)
10~30分	67	(45.0)	58	(44.6)
30分以上	76	(51.0)	2	(1.5)
会話の量				
ケア提供者	13	(8.8)	72	(55.0)
女性	26	(17.6)	3	(2.3)
同じくらい	109	(73.6)	56	(42.7)

また、指導内容についても有意な差($p < .001$)があった(表2)

表2 指導内容

	助産師主導		医師主導	
	n	(%)	n	(%)
温める	146	(98.0)	81	(61.8)
食事	139	(93.3)	86	(65.6)
運動	125	(83.9)	68	(51.9)
休息	81	(54.4)	43	(32.8)
睡眠	68	(45.6)	33	(25.2)

③ WCCの認識とケアの満足度：助産主導ケアを受けた女性の女性を中心としたケアの認識は、(助産師主導 vs. 医師主導：238.8 vs. 207.5, $p < .001$)と、妊娠・分娩・産褥期を通じた満足度($p < .001$)は、医師主導ケアを受けた女性よりも有意に高かった。

④ 分娩のアウトカム：助産師主導ケアを受

けた女性は、医師主導ケアを受けた女性と比較して前期破水(助産師主導 vs. 医師主導 : 14.9% vs. 25.2%, $p = .030$)が有意に少なかった。児のアップガースコア 8 点以上の割合は同等(助産師主導 vs. 医師主導 : 99.3% vs. 97.7%)、分娩直後の臍帯血 pH にも差がなく(助産師主導 vs. 医師主導 : 7.280 vs. 7.298)で、両群とも正常児であった。

⑤ 母乳率 : 助産師主導ケアを受けた女性は、医師主導ケアを受けた女性よりも入院中(助産師主導 vs. 医師主導 : 91.2% vs. 51.1%, $p < .001$)と出産後 1 ヶ月時点(助産師主導 vs. 医師主導 : 83.3% vs. 67.6%, $p < .001$)の完全母乳率が有意に高かった。

⑥ 心理状態 : 助産師主導ケアを受けた女性の Stein の MB 得点は、医師主導ケアを女性と比較して有意に低かった(助産師主導 vs. 医師主導 : 2.67 vs. 4.06, $p < .001$)。EPDS の得点も助産師主導ケア群の女性の方が医師主導ケアを受けた女性よりも低かった(助産師主導 vs. 医師主導 : 4.01 vs. 4.93)が、これには有意差はみられなかった。

このように助産師主導ケアは女性にとって有益であり、産科学的に差はないこと示唆された。

(2) 助産師主導による継続したケアを受けた女性の体験

研究に協力した女性は 13 名で、出産後 1 カ月～1 年 7 カ月を経過していた。年齢は 29～42 歳(平均 34.7 歳)初産婦 8 人、経産婦 5 人であった。チーム助産によるケアを受け始めたのは妊娠 14～22 週で、1 名は分娩期に他院へ搬送となり、出産後に引き続きチーム助産の継続的なケアを受けていた。

妊娠期から助産師による継続したケアを受けた女性の体験は、<助産師と信頼関係を築く>、<不安を取り除き安心感を得た>、<前向きに取り組めた>、<顔見知りだから

こそ得られた個別のケア>、<ありのままにいられた>、<助産師とつながる>の 6 つのカテゴリーが抽出された。

<助産師と信頼関係を築く>では、「いつも気にしてくれた」、「的確なアドバイスをしてくれた」、「スパルタだったけど絶対の信頼があった」などというように語られた。

<不安を取り除き安心感を得た>では「ちょっとの不安でも話せる」、「初めての出産で不安だったけれど、心のケアをしてもらった」などというように語られた。

<前向きに取り組めた>では、「自分のことをメンテナンスすることがサポート」、「こういうことをしたほうがいいというところのほうが多かったので、すごく前向きに取り組めた」などと語られた。

<顔見知りだからこそ得られる個別のケア>では、「私に合った方法も見つけてくれる」、「陣痛が来るために一緒にスクワットしてくれた」などと語られた。

<ありのままにいられる>では、「今は甘えていい時と思えた」、「自分の欲求を平気で言えた」など

<助産師とつながる>では、「帰って来る卒業生みたいな気持ち」、「心の支えだった」「1 ヶ月健診で卒業と言われると寂しい」、「(陣痛が来るのを)待っていている」などと語られた。継続的なチーム助産によるケアを受けた女性は、顔見知りの助産師によるケアで不安や緊張を取り除き、前向きに自ら妊娠や出産に主体的に取り組んだことで分娩体験をより満足度の高いものしたと示唆された。また、その体験が分娩後数カ月以上の時を経ても、助産師や出産場所への愛着につながるのではないかと考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①Midwifery. 2012 Aug; 28(4):398-405.
The relationship between women-centered care and women's birth experiences: a comparison between birth centres, clinics, and hospitals in Japan.
Iida M, Horiuchi S, Porter SE
査読あり

〔学会発表〕（計 2 件）

① 第 26 回日本助産学会 北海道札幌市
（2012 月 5 月 1 日～2 日）
チーム助産による妊娠期からの継続的なかわりの影響
永森久美子、山内淳子、深澤洋子、阿部直子、大隅香、堀内成子

②第 26 回日本助産学会 北海道札幌市
（2012 月 5 月 1 日～2 日）
助産実践のための妊娠期ガイドラインの作成
一助産師による妊娠・分娩・産褥期を通じた継続ケアの効果一
飯田真理子、江藤宏美、片岡弥恵子、八重ゆかり、浅井宏美、櫻井綾香、田所由利子、堀内成子

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永森 久美子 (NAGAMORI KUMIKO)
聖路加看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：60289965

(2) 研究分担者

堀内 成子 (HORIUCHI SHIGEKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：70157056

大隅 香 (OOSUMI KAORU)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：70407625

小黒 道子 (OGURO MICHIKO)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：90512468

飯田 真理子 (IIDA MARIKO)
聖路加看護大学・看護学部・助教
研究者番号：90438854

(3) 連携研究者
なし